

論文

14 世紀後半ワラキアの銀貨について

On Wallachian Silver Coins in the Second Half of 14th Century

安 木 新一郎

YASUKI Shinichiro

抄録

現在のルーマニアとモルドバにあたる地域は、13 世紀にモンゴル帝国に編入された。ルーマニア南部のワラキアにはジョチ・ウルスから代官が派遣された。14 世紀からバサラブとその子孫がワラキアの代官位を継承した。1360 年代に入ると、バサラブの孫ヴラディ斯拉フ 1 世はワラキアで独自のドゥカート銀貨とバン銅貨を発行し始めた。1359 年にジョチ・ウルスで内乱が発生すると、属国への銀の流入が減り、ワラキアやルーシなどでは独自硬貨が発行されるようになったと考えられる。

キーワード

貨幣、ジョチ・ウルス、キプチャク・ハン国、ルーマニア、ハンガリー

1 ジョチ・ウルスとワラキアの関係

現在のルーマニアは、おおよそワラキア（ドナウ河下流域北岸）、モルドバ西部（ドナウ河の支流プルト河西岸）、トランシルヴァニア、ドブロジャ北部（黒海北西岸）から構成されている。首都ブカレストはワラキアに含まれる。また、モルドバ東部はだいたい現在のモルドバ共和国にあたり、主な住民はルーマニア語話者である。

1242年頃にワラキア、モルドバ、ドブロジャはモンゴル帝国、そしてジョチ・ウルス（キプチャク・ハン国）の版図に組み込まれた。

14世紀後半は、ジョチ・ウルスから切り離されてしまったドナウ河下流域の北側において、ハンガリーでもブルガリアでもない、ルーマニアという国家の原形が明確にできあがる時期である。この独自の国家の象徴がドゥカート銀貨である。

ジョチ・ウルスとバルカン諸国との関係については、Vasary（2005）が詳しいが、モンゴル帝国の解体期のバルカン諸国についてまとめたものは少ない。

ワラキアはジョチ・ウルスの支配下にあったが、その実態の詳細は不明である。本稿では、おもに Tataru（2015）で紹介された、旧聖ゲオルギウス博物館所蔵のワラキア公（代官）¹ヴラディスラフ 1 世のドゥカート銀貨 3 種 10 枚を見ることで、ジョチ・ウルスとワラキアの関係について考察する。

2 緩衝地帯としてのワラキア

1236年～1242年のバトの征西により、モンゴル帝国は、東はカザフスタンから西はドナウ河口にいたるキプチャク草原を征服し、隣接地域を版図に組み入れた。ドナウ河流域のスラヴォニア（クロアチア中東部）、セルビア、ワラキア、モルドバ、ブルガリア、ドブロジャはジョチ・ウルスの属国となった。これらの地域に対してビザンツ帝国やハンガリー王国は宗主権を主張していた。ジョチ・ウルスは当該地域を直接統治せず、ビザンツ帝国やハンガリー王国とのあいだの緩衝地帯とした。

ビザンツ帝国は黒海北岸を奄有する勢力に皇女を送るという形で婚姻関係を結ぶことがたびたびあり、ノガイ、トクト、ウズベクといったジョチ・ウルスの諸王（チンギス・カンの男系子孫）もビザンツ皇女を娶った。

ハンガリーはおもにカトリックの布教を通じてキプチャク草原、そして父祖の地であるウラル山脈南麓のバシコルトスタンへと勢力を伸ばそうとした。モンゴル帝国はハンガリーや神聖ローマ帝国などに使者を送り、懐柔しようとしたがうまくいかなかった。バトの征西でハンガリーはモンゴル軍に蹂躪されたものの、モンゴルに服属しなかった。モンゴル軍撤退後もジョチ・ウルスはハンガリーに同盟と婚姻を求めたが、ハンガリーは拒否した。

1259年10月22日付ローマ教皇アレクサンデル4世発ハンガリー国王ベーラ4世宛書簡によると、モンゴルはベーラ4世に以下の条件で同盟を求めている。①モンゴル公主（皇女）がベーラ4世の王子に嫁す、あるいはベーラ4世の王女がモンゴル諸王に嫁した上で、②キリスト教世界への遠征時にベーラ4世の王子が国民の4分の1を率いて前衛となり、③遠征の戦利品の5分の1を取る権利をもち、④貢納は支払わなくてもよく、⑤モンゴル人は領内にはいらず、⑥モンゴル使節の数は100人を超えない²。

なお、モンゴルが属国に課した定例義務として、①国王の出頭、②質子（トルガク）の提出、③戸籍の提出、④軍事協力、⑤糧食その他の物資供出、⑥駅伝（ジャム）の設置、⑦ダルガの設置などがある³。

ジョチ・ウルスにハンガリーを滅ぼすつもりはなく、またそのための兵力もなかった。ジョチ・ウルスは、東における元朝と西トルキスタンのチャガタイ家・ウゲデイ家との対立に注意を払いつつ、南では勝手にアゼルバイジャンやジョージアを奪ったイルハン朝と、コーカサス山脈を挟んでにらみ合いをつづけていた。ジョチ・ウルス軍の主力をハンガリーに振り向けることはできなかったのである。

1250年代のジョチ・ウルスの西方国境はドニエプル河で、その東側に諸王クルムシ（ジョチの長男オルダの子）が6,000～8,000の兵を率いて駐留していた⁴。その後、1265年頃には諸王ノガイがドナウ河口に移駐し、国境はプルト河になったと思われる。ノガイは積極的に西方に派兵し、1285年にはハンガリーに直接侵攻した。

現在でもドナウ河口にはタタール人が住み、タタリカなどの地名が残っている。また、ルーマニアにはヤシ Iasi、ウクライナ・オデッサ州にはヤシキ Яськи など、どちらも「ヤス（アス）の」の意味であるが、北コーカサスのア

スト（ヤスのモンゴル語。現在のオセツト人）が西方国境に移住した名残が見られる。アストはジョチ・ウルスを構成する重要な部族だった。

1299年頃にノガイがジョチ家当主トクトに討たれ、ノガイ一族が勢力を失うと、西方国境にはジョチ家当主の代官が派遣されるようになった。西方国境の方針は専守防衛に変わり、属国からの要請により派兵するようになった。

3 バサラブ朝の成立

1310年頃のワラキアの代官はバサラブ（バサラ・バイ）だった。ロシア語圏ではバサラブを諸王とする説もある⁵。イルハン朝の君主はカアン⁶のダルガと称していたことから、ダルガであるバサラブ一族が諸王である可能性もある。しかしながら、バサラブ一族が諸王を名乗ることはなかったので、モンゴル・チュルク系の千人長の家系につらなる者であろう。

ハンガリーは自身の領土だとするワラキアのバサラブをハンガリーの臣（ヴォイヴォド）と見なしていた。しかしながら、バサラブはジョチ・ウルスの属国ブルガリアやセルビアだけでなく、ローマ教皇ヨハネス22世とも外交関係を結んでハンガリーを圧迫した。ヨハネス22世はジョチ・ウルスのウズベク・ハンと友好関係にあった。

1330年にブルガリア・ワラキア連合軍がセルビア軍に大敗すると、ビザンツ軍がブルガリアに侵入し、ブルガリアは危機に陥った。また、ハンガリー軍も南下してきた。バサラブはブルガリアとセルビアの両方と同盟し、侵攻してきたハンガリー軍を撃破した。1331年にはブルガリア皇帝に娘婿のイヴァン・アレクサンドルを就け、ジョチ・ウルス軍とともにビザンツ軍を破った。ワラキア、ブルガリア、セルビアのあいだでも紛争が絶えなかったが、ジョチ・ウルスの枠内でのめごとであり、これに対してハンガリーとビザンツは彼らの共通の外敵だったのである。

1352年にバサラブが死去し、息子のニコラエ・アレクサンドルが後を継ぐと、ハンガリー、セルビア、ブルガリアと婚姻関係を結び、勢力均衡に努めた。ニコラエはバルカン諸国共通の義父となった。

結果的に、バサラブ家が南東欧におけるジョチ・ウルス君主の代理人となったのであろう。モルドバでは事実上入婿のかたちでバサラブ家出身のコスチャとその子孫が公位を継承した。

ジョチ・ウルスは周辺諸国の君主に公主を降嫁することがほとんどなかった。例外的に、ウズベク・ハン時代、マムルーク朝とモスクワ大公国に降嫁した例が知られているが、それぞれ一回だけであり、婚姻関係が継続することはなかった。おそらくジョチ家から見ると、ハンガリー国王を除けば、セルビア、ルーシ、リトアニアなど属国の君主は婚姻関係を結ぶには格下だったのであろう。また、先に述べたように、ビザンツ皇帝からは逆に皇女を娶っており、両者は一応対等な関係だったと思われる。

ウズベク・ハンは、属国同士の争いが起きると、ある程度放置した後、調停に乗り出した。これに対して、ビザンツ帝国のような外国が現状の勢力範囲の変更を迫れば、軍を派遣して懲罰をおこなった。

4 最初の銀貨

1364年にニコラエ・アレクサンドルが死去し、息子のヴラディスラフ1世（在位1364年～1377年）がワラキア公となった。ヴラディスラフ1世はワラキアで初めて独自硬貨を発行した公である。以下、Tataru（2015）にもとづいて最初の銀貨について見ていきたい。

ヴラディスラフ1世の銀貨は、その後のワラキアにおいて理想とされるものであり、実際、時代が下るにつれ、銀貨の量目の減少、品位の低下が見られる。

ジョチ・ウルスでは1359年にベルティベクが暗殺され、1380年にトクタミシュが再統一するまで混乱がつづいた。こうした中、おそらく銀や貝貨の流通が滞るようになり、ルーシ⁶やワラキアでは独自硬貨を作るようになったと考えられる。

ハンガリーではヘブライ文字アレフ[Ⓚ]が中央に打刻されたデナル denar 銀貨などが作られていたが、14世紀に入りアールパード家が断絶し、アンジュー家に王位が移ると、ヴェネツィアのドゥカート ducat 金貨を参考に、ハンガリー独自のドゥカート貨を製造するようになった。

ワラキアでは金貨ではなく銀貨としてドゥカート貨を作り始め、その後、銅の割合が多い合金貨 **billon** やバン銅貨 **ban** も製造された。

古銭売買のウェブサイトでは現在でも、ワラキアの硬貨をドゥカート、ドゥニエ **denier**、バンの3種類に分けているが、ドゥニエとされたものは実は軽いドゥカートであり、ドゥカートと小額硬貨のバンの2種類しかなかったというのが現在の説である⁷。なお、「バン」はルーマニア語で貨幣一般を意味する。

ヴラディスラフ1世のドゥカート銀貨には、「ヴラディスラフ1世」と「ヴォイヴォド」の文字が刻印されているが、ラテン文字のものとスラブ文字のものがある。スラブ文字の硬貨には☾（三日月）と✴（星）が入っている。これに対してラテン文字のものには三日月と星は刻印されていない。さらに、ラテン文字のものは盾が刻まれているのものと、そうではないものに分けられる⁸。

硬貨の形式や盾に描かれた紋章 **coat of arms** についてはハンガリーからの影響であることは明らかなが⁹、すでに述べたように、すべての銀貨に盾や紋章があるわけではなく、また銅貨には見られない。量目は0.66グラム～1.13グラムであり、ジョチ・ウルスのダング（アクチェ）銀貨と同じである。また、形状は円形といってよく、直径の最大値は19.45ミリで、これもダング銀貨と同じである。

ワラキアには金貨がないことも、ジョチ・ウルスの幣制と同じである。ジョチ・ウルスでも初期は金貨が発行されていたが、重要ではなくなっていく。幣制の面で、ワラキアはジョチ・ウルスの後継国家の一つだと言えるだろう。

5 国際決済手段としての銀貨

ワラキアやモルドバは、ジョチ・ウルス支配下で中継貿易の拠点として発展した¹⁰。ワラキアはドナウ河をさかのぼるとハンガリーに至り、下るとクリミアやコンスタンティノーブルと海路でつながっている。ドナウ河口域のドブロジャやドニエストル河口にはジェノヴァ居留地が設けられ、ジョチ・ウルスの庇護下で交易と徴税に必要な硬貨発行がおこなわれていた。

1360年代にワラキアが、おそらくハンガリーから硬貨製造人 **moneyer** を招き寄せて独自硬貨を作り始めたのは、ジョチ・ウルスからの銀貨流入が極端に減ったことで銀貨が不足したからだと思われる。アフロユーラシア全体で銀の流通が

滞る中、ジョチ・ウルスは内乱状態となり、黒海北岸の交易も混乱したのであろう。

ワラキアのドゥカート銀貨の名称や紋章などがハンガリーからの借用だったとしても、重量はジョチ・ウルスの銀貨と同じものである。ジョチ・ウルス銀貨が地域間決済手段だったからであろう。また、使う文字を分けたのは、対ハンガリー用決済手段と対ブルガリア・セルビア用決済手段の2種類が必要だったからである。ワラキアの銀貨は、周辺諸国に対して独立国であることを示す宣伝材料でもあったと考えられる。

補注 ラックはワラキアを指すのか

モンゴル帝国期のワラキアに関する情報はきわめて少ない。いわゆる『東方見聞録』に、ラク Lac という地名が登場するが、ワラキアを指すとの説がある。

ラクはジョチ・ウルス（西タルタル国）に関連した箇所にある。

結論から言えば、『東方見聞録』のジョチ・ウルスに関する記述はトクトに有利な内容で、北コーカサスがジョチ家固有の領土であることを主張したものとなっており、ラクはワラキアではなく北コーカサス・ダゲスタン南部を指すと考えられる。

以下では、『東方見聞録』の主にZ写本におけるジョチ・ウルスに関する記述を確認したい。

歴代君主は、①サイン、②パトゥ、③ベルカ、④モングテムル、⑤トタモング、⑥トクタイの順番となっている¹¹。

ジョチ家の初代は当然ジョチだが、二代バト、別名サイン・カンと混同されていることが分かる。

二代バトがパトゥ Patu になるのは、アラビア文字 b とペルシャ語固有の文字 p は字形が似ていて、よく間違えられるからだろう。F 写本では Batu となっている。また、トクト（脱脱）はジョチ・ウルス発行硬貨には Tuqtu などとアラビア文字で表記されるが¹²、ペルシャ語史料だとトクタイ Tuqtay などとなっている。『東方見聞録』のほとんどの資料がペルシャ語で書かれていた可能性が高いと思われる¹³。

二代バトと五代ベルケとの間にバトの子サルタクと、その子ウラガチが入っておらず、『東方見聞録』のもととなる資料あるいは資料提供者は、サルタクとウラガチが君主だったと認識していない可能性がある。サルタクはバト死去時にカラコルムにおり、サライに帰る途中で亡くなった。ウラガチの下にルーシ諸公が貢納しにきていた記録もあり¹⁴、1256年頃ウラガチは君主としての仕事はしていたものの、短期間だった。バトの次は弟のベルケだというのが、当時のモンゴルでの一般的認識だったとしてもおかしくはないだろう。

トデモンケとトクトの間にトレブカ（『東方見聞録』ではトルブガ）統治の時期があるが、トクト期のジョチ・ウルスではトレブカが君主であったとは認めていなかったのだろう。ラシード・アッディーンもトレブカを含む4人の諸王による共同統治だったという描き方をしている。とはいえ、硬貨にはトレブカと、クリミアなど黒海沿岸に限られるが、諸王ノガイの名しか刻まれておらず、トグルルチャなど共同統治者とされる諸王の名はない¹⁵。トレブカがジョチ・ウルス君主だったことは間違いない。

『東方見聞録』ではモンケテムルの次がトレブカで、トデモンケがトレブカを殺害したことになるが¹⁶、実際はモンケテムルの弟トデモンケがトレブカから廃位された。トクトがトレブカを殺害して君主になった事実が隠されている。

次に、ジョチ・ウルスがキプチャク部族（クマン人）から得た土地についての記述を見ると、まず、サイン王が征服したことになっている。これらの土地がジョチ以来のジョチ家の占有だという主張も、ジョチ家およびトクトにとって重要であろう。

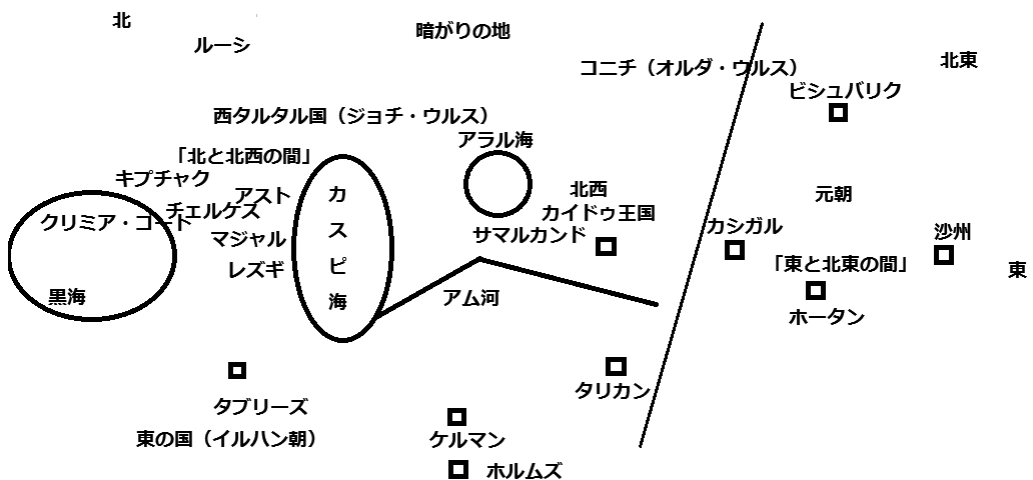
キプチャク部族が支配していた地として、①クマニア、②アラニア、③ラック、④メンジアル、⑤ジック、⑥グティア、⑦ガザリア、⑧ロシアの一部と列挙されている¹⁷。

それぞれ①キプチャク草原、特にクバン河流域、②オセット人（アスト）の居住地、ヴォルガ河下流から北コーカサス、⑤チェルケス人、黒海東岸、⑥クリミア・ゴート人、クリミア半島南岸、⑦ハザールの地はラテン人のクリミア半島の呼び名、⑧ルーシで問題ないだろう。

③ラクは「北と北西の間にある一地方」¹⁸とされ、独自の王がいて、ムスリムとキリスト教徒が住み、良質な毛皮の産地で、「商売と職人仕事で生き」¹⁹ている。ラクはジョチ・ウルスに毛皮を貢納していたが、「独自の王」がいるので、ジョチ・ウルスは直接支配していない。また、「商売と職人仕事で生き」ているということは、農耕がさかんでなかったことを意味する。これに対してワラキアは小麦の輸出国である。

「北」にはルーシが、「北西」には「大トルコ」、つまり西トルキスタンのカイドゥ王国があって、アム河を越えて北に行くと「大カンの国」、元朝に至る。したがって、「北と北西の間の地」とはコーカサスやヴォルガ河流域にあたる。

図 『東方見聞録』に基づく地名、民族分布の概念図



出所) 筆者作成。「北西」はカイドゥ王国、つまりトルキスタンで、「北」はルーシやノルウェー方面なので、コーカサスは「北と北西の間」に位置する。

『東方見聞録』の往路で説明されるサマルカンドは「北西」にあるとされる。サマルカンドはトルキスタンの主邑なので「北西」にあるのは矛盾がない。カイドゥ王国の西トルキスタンは「北西」、元朝支配下のカシガル以東やビシュバリク（「ギェンギン・タラス」）を含む東トルキスタンは「東と北東の間」と記される。これらは方位ではなく、「北西」はカイドゥ王国、「東」は華北、「北東」はモンゴル高原を指すのであろう。

ラクがワラキア²⁰だったり、メンジアルがハンガリー²¹だったりすることはなく、ラクは北コーカサスのダゲスタン南部、④メンジアルはマージアル市を中心とする北コーカサスの中央部のことだと思われる²²。なお、ラク人は現在でも北東コーカサスに居住している。

1236年～1242年のいわゆる「バトの征西」でモンゴル帝国はキプチャク草原とその隣接地域を征服したものの、1250年代は北コーカサスの平定戦が行われていた²³。また、ヴォルガ河流域、ルーシ、北コーカサス、クリミアなどは帝国直轄領、つまり諸王による共同所有であり、ジョチ家の占有地ではなかった²⁴。「バトの征西」で得られた属領が正式にジョチ・ウルス領になったのは、テムル・カアンやカイシャン・カアンの時代、つまり14世紀初頭のトクトの時代だと考えられる²⁵。

『東方見聞録』にあるジョチ・ウルスに関する記述は、トクトにとって都合のいい内容で、ヴェネツィアの諜報機関はジョチ・ウルス政府あるいはこれに近い人物から公式見解を得たものと思われる。

コーカサスはジョチ・ウルスとイルハン朝との間の緩衝地帯だった。モンゴル帝国初期にジョチ家の支配下にあったジョージア（グルジア）では、モンケ・カアンの時代にジョチ家の官吏の監督下で人口調査がおこなわれたが、フレグに奪われ、ジョージアではイルハン朝の硬貨が発行された。とはいえ、ジョージア王家は存続し、イルハン朝の直接支配はうけなかった。

北コーカサスはジョチ家の属領だったが、例えば、イルハン朝滅亡以前にデルベント（鉄門）でジョチ家の硬貨は作られていなかった。

北コーカサスにはマージアル以外にも造幣局があった可能性がある。貨幣考古学の研究成果に基づいて、ジョチ・ウルスによる北コーカサス、特に現在のダゲスタンにあたる地域の統治の実態、およびアヴァール人の国家形成について考えるのが、今後の研究課題である。

注

¹ 公あるいは代官はヴォイヴォド voivod/voivode の訳語である。スラブ人は古くから軍政管民官、つまり軍を率いて占領地の徴税等を担う官職として、ヴォイヴォド、ロシア語だとヴォエヴォダ воевода という単語を使っている。モスクワがシベリア各地に派遣した官もヴォエヴォダであり、モンゴルのダルガにあたる。ワラキア公とはワラキアに派遣されたダルガである。

² ドーソン (1968)、206 頁。

³ 森平 (2011)、18 頁。

⁴ 諸王クルムシ (ジョチの長子オルダの子) が、カルピニは 6,000 人 (高田編訳 (2019)、76 頁) を、ポーランド人ベネディクト修道士は 8,000 人を、率いていたと記録している (護訳 (1979)、119 頁)。

⁵ Vasary (2005), pp149-155.

⁶ 安木 (2023)、104 頁～110 頁。

⁷ Tataru (2015), p.234.

⁸ Ibid, pp 233～234.

⁹ Ibid, pp235～236.

¹⁰ 武田 (2003)、6 頁。

¹¹ 高田訳 (2013)、600 頁。

¹² 安木 (2023)、87 頁～88 頁。

¹³ 松田 (2002)。

¹⁴ 栗生沢 (2007)、183 頁。

¹⁵ 安木 (2023)、57 頁。

¹⁶ 高田訳 (2013)、613 頁。

¹⁷ 前掲書、600 頁。

¹⁸ 前掲書、597 頁。

¹⁹ 同上。

²⁰ 愛宕訳 (2000)、412 頁。

²¹ 高田訳 (2013)、599 頁。

²² 諫早 (2023)、117 頁～118 頁。

²³ 同上。

²⁴ 高田編訳 (2019)、282 頁を見ると、1250 年代にモンゴル帝国を旅したフランス人修道士ギョーム・ド・リュブリキは、デルベントの近くにモンケ・カアンのものである、アラン人の城塞があると記録している。

²⁵ 安木 (2023)、80 頁～91 頁。

参考文献

諫早庸一 (2023) 「ハンの巡行ージョチ・ウルスにおける〈移動〉のポリティクス」、『スラヴ研究』、70、105 頁～136 頁。

-
- 愛宕松男訳注（2000）『完訳マルコ・ポーロ東方見聞録 2』、平凡社。
- 高田英樹訳（2013）『マルコ・ポーロ/ルスティケロ・ダ・ピーサ世界の記：「東方見聞録」対校訳』、名古屋大学出版会。
- 高田英樹編訳（2019）『原典中世ヨーロッパ東方記』、名古屋大学出版会。
- 武田元有（2003）「オスマン帝国の黒海穀物貿易独占とモルダヴィア・ワラキア（上）」『鳥取大学教育地域科学部紀要、地域研究』、4（2）、1頁～39頁。
- ドーソン、C.（佐口透訳注）（1968）『モンゴル帝国史 1』、東洋文庫。
- 松田孝一（2002）「中国史への招待（6）『東方見聞録』のなぞーモンゴル帝国史話（中）」、『月刊しにか』、84頁～89頁。
- 森平雅彦（2011）『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』、山川出版社。
- 護雅夫訳（1979）『中央アジア・蒙古旅行記』、桃源社。
- 安木新一郎（2023）『貨幣が語るジョチ・ウルス』、清風堂書店。
- Tataru, C.(2015)Medieval Wallachian Coins from the Saint-Georges Museum Numismatic Collection, *Cercetari Numismatice*, CE, XXI-XXII, anui 2015-2016, pp229-254. The National History Museum of Romania. Bucuresti.
- Vasary, I.(2005)*Cumans and Tatars :Oriental Military in the Pre-Ottoman Balkans, 1185-1365*. Cambridge.